

社会贡献者表彰 50周年記念記録集

公益財団法人
社会貢献
支援財団

目次

まえがき	4
会長あいさつ	5
笹川陽平 日本財団会長・安倍会長対談	6
曾野綾子前選考委員長メッセージ	13
安倍昭恵会長インタビュー	14
50周年記念表彰 受賞者紹介	24
表彰選考委員プロフィール	34
選考委員 座談会	36
歴代会長一覧	47
表彰式のひとコマ	48
資料	62

まえがき

当財団は、1950年のモーターボート競走法制定から20周年を記念して、1971年5月1日に「財団法人 競艇記念 日本顕彰会」として設立され、今年で50周年を迎え、これまでに12,579件の方々を表彰させていただきました。

初代会長には故 笹川良一が就任し、設立の趣旨について「一生を環境の厳しい職場に捧げた人、自らの危険を顧みず海難その他の事故や災害の救難にあたった人、人間の幸福のためにきわめて有益な発明をした人など犠牲的な精神、努力、創意工夫をして専心社会に尽くされた人々の功績は誠にはかり知れないものがあります。これらの人々に感謝の意を表し、その功労に報いることは、われわれ国民として当然なさねばならないと信ずるものであります」と語られています。

その精神を礎に、全国規模の顕彰（表彰）とその事業を後援する民間財団として事業を開始し、1972年に第1回の社会貢献者表彰式典を開催。現場業務に精励した運輸交通の関係者や、人命救助・社会福祉の増進などに尽くされた一般功労者等、地域の環境美化や功德心の涵養などの善行者を表彰しております。

その後、2001年には名称を「社会貢献支援財団」に改称するとともに、表彰制度も時代に即した功績へと対象を変え、2008年には公益法人制度改革の実施に伴い、当財団設立40周年を迎えた2010年8月31日、内閣府より「公益財団法人 社会貢献支援財団」としての認定を取得し現在に至っております。

これもひとえにモーターボートレースの施行者、競走会、選手会そして日本財団をはじめ関係者の皆様のご理解とご協力によるものと、心より感謝申し上げます。

50周年を記念して製作いたしました本記録集は、表彰の意義や課題、50周年記念表彰受賞者の活動、50年の受賞者の記録などをまとめました。

ご一読いただき、忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いです。

さらなる表彰事業の発展に向けて、役職員一同努力して参りますので、今後とも当財団へのご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

公益財団法人 社会貢献支援財団

会長あいさつ

社会貢献支援財団が関係者の皆様のご理解とご協力により50周年を迎えます。この間に財団が表彰した方々は、その後も幅広い分野で活動を続けております。

私は就任以来7年、表彰式典で数多くの受賞者の方々にお目にかかってきました。いずれの方の活動も素晴らしく、その善行と共に勇気や優しさに触れ、わが国の素晴らしさを改めて感じております。

この間、多くの受賞者の方々と実際に言葉を交わし、現地に赴いて活動を目の当たりにしてきました。皆さん、明るく、自分らしく活動をなさっており、やらされている感じなど微塵もありませんでした。

そこに今、新型コロナウイルスが大きな影を落としています。活動が制限されている方々や、海外でしたら現地に赴くことができない方々もいらっしゃるでしょう。活動をしている皆さんにとりましては厳しい日々が続きます。

しかし、こんなときこそ支援の出番でもあります。できる人ができることを、という気持ちは、いつも、誰の胸にもあるかと思えます。できる範囲で積まれた善行が集まれば、世の中は少し変わっていきます。いつまでも、この状況が続くわけではありません。新しい社会に向かっては、新たな支援を必要とする方々に寄り添う必要があります。

活動が続いている団体に共通しているのは、ぶれない信念を持った方の存在です。財団も強い信念で、皆さんの活動を支援していく所存です。

この度は受賞者の皆さんの活動を通じて得た感動や思いを日本財団・笹川陽平会長との対談や表彰選考委員の吉永みち子氏によるインタビューにまとめさせていただきました。会長としての決意をお伝えできれば、望外の喜びです。

公益財団法人社会貢献支援財団
会長 安倍 昭恵

日本財団 会長
笹川陽平氏
 対談



当財団は1971年に設立され、今年で50周年を迎えます。設立に尽力され、長年、サポートしていただいている日本財団の笹川会長に設立の経緯などをうかがいます

笹川：社会のために何かお役に立ちたいという方々、あるいは目に見えないところでいろいろ努力をしてくださっている方々が日本にはたくさんいらっしゃいます。そういう方々によって、社会が支えられているという部分がたくさんあるわけです。

もともと日本人は利他の精神を持っています。コミュニティーの中で困っている人がいたら助けますし、災害で被災された方々のために進んでお世話をするなど、素晴らしい国民性をずっと持ち続けてきた国です。

目立つところだけでなく、目に見えないところで善行を積んでいる方々を激励したいという思いで財団が設立されました。励ますことによって、そのような方々が増えていきます。そういう方々を激励し、日本の良き伝統である利他の精神を広げようと表彰制度を始めました。その精神は現在の安倍会長に至るまで、ずっと続けていただいています。

安倍会長は2014年から会長に就任されました。社会貢献支援財団への印象や思いはいかがですか

安倍：会長に就任して以来、表彰式で受賞者の方と交流するほか、実際に活動を拝見したりしております。この間に表彰が年1回から2回になり、より多く受賞者の方々に接する機



い。それぞれの皆さんは地域で本当に素晴らしい活動をしているのですが、まだ知られていない部分がたくさんあります。

笹川：安倍会長が就任されてから、一段と社会貢献支援財団の存在が世の中に知られるようになりました。お忙しい中、安倍会長ご自身が受賞者の活動の場に足を運び激励していただいているので、表彰された方々は大いに喜んでいらっしゃいます。

近年は、特に海外で活躍している日本の方々を表彰していただくようになりました。若い人たちが海外で良い活動をなさっていることがだんだん知られるようになっていく。日本人の海外での活躍が足りないとか、若い人たちに対する批判もありますが、自発的にそのような活動をなさっている素晴らしい方々もたくさんいらっしゃるわけで、そのような方々を表彰するようになったことは素晴らしい試みですね。

よく「自助、共助、公助」といわれます。自身で備える自助、行政が行う公助、そして地域で助け合う共助。受賞者の活動の大部分はセーフティネットから漏れた人たちを支援する共助だとおもいますが、その意義をどうお考えですか

笹川：共助の活動への気持ちが、特に若い人たちに芽生えてきているのは素晴らしいことです。この50年間に表彰された多くの方々の日々の努力の成果が、目に見えないところで大きく広がっているのでしょう。

日本にはかつては共助の精神がありました。コミュニティーがあって、隣にどんな人が住んでいるのか分かっていたし、お互いに助け合って生きてきました。近代化が進むと、隣に誰が住んでいるのかわかりませんし、助け合いの精神も少し欠けてきてしまっています。活動が若い人に広がっている今、財団でも50年を機に、共助の活動の広がりに尽力されることを願っています。

それにしても行政の支援から漏れている方々、あるいは行政の支援を受けられない方々に対して、民間の皆さんが手を差し伸べていらっしゃるというのは本当に素晴らしい話で、ありがたいことです。

安倍：困っている方の支援については、もちろん行政でカバーできるところはカバーしていかなくてはなりません。しかし、行政がすべて把握し、支援するということは現実問題としてなかなか難しいことだと思います。

そういう中で、行政に不満を言うだけでなく、「自分たちの力で何ができるだろうか」と考えて、積極的に活動していただいている方々には、政治家の妻の立場からも、本当に感謝を申し上げたい気持ちでいっぱいです。みんながそれぞれの立場で、自分ができることをやりながら助け合っていく社会が、本当に良い社会ではないかと思います。

笹川：より良い社会になるように、国民が公助だけでなく、お互いが助け合う共助の活動は大切なことですね。今は個人が孤立して、かつてのようなコミュニティーが、まあ地方には若干残っていますが、大都市には存在なくなってしまうました。

我々の年齢になると、各地に老人クラブがありますが、孫の自慢と病気の話と政治に対する不満を言うような集まりであってはいけません。年寄りも年寄りでも、できることがいくらかもあるんですよ。ましてや、お年寄りが「うるさいから」という理由で託児所を作るのに反対するなんていうのはとんでもない話です。子供は国の宝で、将来の日本を背負う子供たちを大切にするというのは当たり前です。明治時代に日本に来た外国人はみんな「何で日本はこんなに子供たちを大切にしない国なんだ」と驚きの声を上げた文書も残されています。今はまったく逆の状況になっています。

皆が皆を助ける、助け助けられる社会を作る。社会貢献支援財団は、そのような社会をつくるための活動の核、起点になると思っています。50年続けてきたのですから、継続は力なりですよ。困っている方々を支援する意味でも、若い人たちに共助の精神を持ってもらう意味でも非常に大切です。

安倍会長はミャンマーで学校を作るなどの活動を通じてさまざまな体験をなさっておられますね。

社会貢献活動の方向にも変化が出てきていますか

安倍：笹川会長が言われたように、本当にコミュニティーがとても重要な時代になってくると



思います。昔は企業が終身雇用で、家族のような役割を果たしていたと思いますが、それが崩れてしまっています。そんな中、助け合いの方法も変化していくような気がします。

今は所有からシェアの時代に、と言われてます。車なんかもそうですけど、今の若い人たちは車とかは所有しないで、みんなでいろいろなものをシェアしていこうっていう風潮です。私などはバブルの年代ですから所有したいほうでしたけれど、今の若い人たちはそのあたりの価値感がすごく変わってきています。だから、若い人なりのシェアの仕方だったり助け合いの仕方だったりを理解してサポートしていきながらいけることができればいいなと思います。

笹川：それは本当に大きな変化ですね。私などはシェアハウスなどと聞いても理解できない部分もあるのですが、よく考えてみれば、若者同士で情報を共有し、足りないものをお互いが補っていくという新しいコミュニティーかも知れませんね。

社会貢献支援財団の今後について

安倍：何十年も同じ活動を続けていらっしゃる方はもちろん素晴らしいですけど、若くて積極的に新しい価値観の中で何かを生み出そうとしているような方々も、これから積極的に表彰していけたらいいと思っています。私は表彰式典で受賞者とお会いしたり、実際の活動の場を訪ねたりしていますが、自分自身にとって励みや学びになり、ありがたいと思っています。何より、表彰された方々が表彰状を飾って喜んでくださっているのが、とてもうれしいです。



笹川：皆さん、表彰状だけでなく安倍会長との2ショット写真も飾っていますよ。

ところで、社会貢献支援財団という名称はちょっと言葉的に硬いのではないですか。必要であれば、安倍会長に新しい時代にマッチした名前を考えていただきたいですね。もう少し若者にフィットする名前のほうがよいのではないのでしょうか。

安倍：社会貢献支援財団という名称は歴史があるので、それはそれで残しておきながら、何かもう一つ分かりやすいものがあれば作ってもいいかもしれないなと思います。

笹川：先ほど若い人たちに共助の活動が芽生えていると申し上げましたが、今の表彰制度のほかに、未来を背負う若い人たちを表彰することも考えていただきたいと思っています。青年の表彰とでもいいですか。今も海外で活動している若い方々を表彰していただいています。彼らは誰にも知られずにやっているの、表彰されることによってSNSで情報を拡散でき、資金集めに大変役立っているようです。

若い方々に限らず、皆さん、本当に良い仕事をやっていただいている。その活動をもっと多くの人に知っていただきたいですね。困っている方や悩んでいる方に手を差し伸べる方々が地域の中にならっしゃるといことは素晴らしいことです。役所もやりますが、いろいろルールが複雑のようですし、すべてに行き届いた支援というのは難しいと思います。そういう意味では、心と心が接するように支援の活動をしている受賞者の方々というのはユニークな存在なのではないでしょうか。

僕らが子供の時は、「悪いことをして見えないと思ってもお天道様がちゃんと見てるぞ」と親から叱られたものです。その人の行いは誰かが見ている、ということですね。

良い活動をしている皆さんは、決して誰かに見て欲しいと思ってやっているわけではありませんが、やはり表彰されることは、結果的に誰かが見てくれた、評価してくれたということで、すごく励みになっていると思います。

安倍：受賞者の皆さんは本当に素晴らしい活動をされていらっしゃると思いますので、続けていただきたいと思っています。大変なことをされていて、私なんかから見ると、ご苦労も多いただろうな、と思ってしまうのですが、皆さん、使命というか、生き生きと楽しんでやっているのが素晴らしいと思います。

しかし、皆さんには元気でいていただかないといけません。すごく頑張り過ぎて、自分の寝食を忘れて没頭されている方がたくさんいらっしゃいます。表彰の副賞は皆さんの楽しみのためにお使いください、ということをやった選考委員長がおっしゃっていますが、私もそう思います。でも、やっぱりほとんどの方が活動に使われているみたいですね。

笹川：あれは選考委員長だった曾野綾子さんが最初におっしゃったんですね。ご苦労なさっているの、たまにはこれで少しの贅沢をしてください、と。代々受け継がれていることですが、皆さん活動に使っていらっしゃいますか。

安倍：そういう方が多いと思います。改めて、ご自身も楽しんでいただくために使っていただきたいと思っています。

笹川：元気じゃないと困りますもんね。

安倍：一方で、ボランティアをしたくてもどうやっていいかわからない、子育ても終わって時間に余裕ができて、何か人のためにしたいけど、どうしていいかわからないという人が結構いると思いますので、そういう人たちと活動とのマッチングができればいいとも考えています。

笹川：それは素晴らしいことです。

受賞者間のネットワーク作りも必要かもしれません

笹川：いいですね。活動をしている方々同士でも、普段、共に苦勞をしている間柄だと愚痴をこぼせない。お互いに愚痴を言い合えるということはすごく大事で、決してマイナスのことではないんです。ご苦労を発散するのは重要です。

私は一昨年、27回も海外に出向いているんですけど、今は新型コロナウイルスの影響でゼロです。その分のほとんどをウェビナー（ウェブによるオンラインセミナー）でやっています。コロナ下で経験したことの中で、これは大変便利ですよ。ぜひ社会貢献



支援財団が中心になってウェビナーで皆さんに参加していただいて、「私は九州の何々でこんなことやっているんですけど」と説明したり、北海道の人が「私は北海道だけど、あなたと同じようなことをやっているの、これからちょっと情報交換しましょうか」と交流したりすることは、皆さんの励みになることでしょう。

この方法だと「一生懸命やっているけどもうダメだ。そろそろやめようと思っているんだけど、あなたは同じ年齢なのにずいぶん頑張っているね、秘訣は何か」「もう年をとってしまって活動をやめようと思うんだけど後継者になってくれる人いるかな」なんて話もできる。そういうプラットフォームを財団が中心になって作るというかも分かりませんね。受賞者という共通項がある方々が全国にいらっしゃるんだから、続けていくと、それぞれの地域の核になる人が出てくるのではないのでしょうか。

良い活動を広げていきたいものですね。限られた人たちだけが良いことをするんじゃなくて、それがどんどん広がって、濃淡はあるにしても、国民みんながそういう気持ちになっていくというのはすごく素敵なことですね。

安倍: そうですね。自分ではできなくても、できることがちょっとでもあればお手伝いに気軽に行けるような、何かそういう仕組みが財団の中でできればいいと思います。受賞者間のネットワーク化も取り組むべき課題です。

いろいろなアイデアをいただいたので、考えていきたいと思います。今後ともよろしくお願いします。

対談ありがとうございました。

社会貢献 と 表彰

曾野綾子

(前 表彰選考委員長)



私たち人間の中には、常に矛盾した情熱が潜んでいる。自分を棚に上げて、他人の悪口を言うことも多いのだが、「人の振り」を見て、「自分もあになりたい」「自分もあういうことをしたい」と憧れることもある。

しかし思いがけないことに、他人に対する批判を口にする場は世間に多いのだが、ほめる言葉を正確に聞かせてくれる場は意外に少ない。

社会貢献支援財団がそのむずかしい任務を負って下さってから、今年で五十年になるという。

何事にせよ五十年続かせるには覚悟が要る。人間の仕事には、総じて覚悟が要るのだが、総理大臣を務めるなら大きな覚悟が必要で、小さなことならいい加減な覚悟でいいということはない。

社会貢献の仕事というのは多くの場合、目立たない。仕事の性格上泥をかぶっていることさえ多い。それを発見して、丁寧に泥を洗い、磨き上げて見せて下さると、私たちはその輝きと力強さに改めて驚くのである。

実は、社会貢献をする人々の九十八パーセントまでは、自分の行為がほめられ、推奨されることに、抵抗感を覚えている。誰だってその立場にいたら、自分と同じことをしただろう、と思えるから、褒められるほどのことをしたのではない、と思っているのと、自分がしたような行為は、ひっそりと静かに行われてこそよかったのだ、という思いがあるからだ。これが貢献をする方の人々の思いだ。しかし同時に、社会はそうした人々の果した仕事について聞きたがる。これは現世でめったにない心動かされる美しい話だからだ。その願いが全く聞き入れられなくてもいい、ということもない。

社会貢献という灯そのものがなければ、この財団の存在もなかったのだが、もしその灯が高く掲げられなかったら、私たちは人間であることに誇りをもち、可能性さえ信じられないだろう。

【撮影 / 高山浩数】

インタビュー 社会貢献活動と表彰について

安倍昭恵会長インタビュー

インタビュアー

吉永
みち子
表彰選考委員



安倍
昭恵
会長

— ボランティア活動の現場に女性は多い —

吉永：安倍さんは社会貢献支援財団の会長に就かれて7年目になりますが、そもそも財団とのご縁はどこから始まったのですか。

安倍：カンボジアで地雷撤去の活動をなさっている NPO 法人「国際地雷処理・地域復興支援の会」の高山良二さんが財団で表彰されることになった時に、表彰式に呼んでいただいたのが関わりの始まりだったんですね。それ以前に、私は高山さんが活動しているカンボジアの地雷撤去の現場を曾野綾子先生と一緒に訪ねたことがあったんです。このような活動をしている方々を表彰する財団があるということは知っていたんですが、前会長の日下公人さんがお引きになるという時に、日本財団の笹川会長を通じてお話があって引き受けることにしたんです。

吉永：高山さんのような社会貢献活動をなさっている方との交流は以前からけっこうおありになったわけですね。

安倍：そうですね、いろいろな形の活動を拝見したり聞かせていただいたりしていました。自分自身もミャンマーで支援活動してきたこともあって、とても関心はありましたね。

吉永：実際に財団の会長に就かれてからは、さまざまな活動により一層触れる機会が多くなったと思うのですが、どのようなご感想をお持ちになりましたか。



安倍：もう毎回、「本当に素晴らしい方が日本にこんなにたくさんおられるんだ」という感動の連続です。表彰式典で皆さんのお話をうかがったり映像を見せていただいたりするだけでなく、現場に向かい実際に活動内容を見せていただいたり、改めて皆さんからお話を聞いたりすると、一層その素晴らしさやご苦労が分かって勉強になりますし、そのような方々の活動をもっと広く多くの方に知っていただきたいという思いが強くなります。

吉永：会長になられたころは総理夫人で大変にお忙しい時期だったと思うのですが、かなり精力的に多くの活動の現場にいらしてますよね。

安倍：それでも、なかなか行きたいところ全部に行ける状況ではありませんでした。総理夫人の立場から外れたので、これからはもっと多くの現場に実際に出向きたいと思っています。

吉永：今、さまざまな分野で女性の比率を増やしていこうという流れがありますが、実際に NPO でボランティア活動をしている方など女性が多いですね。

安倍：そうですね。男性が多いという印象を持ったことは一回もないので、やはり男女が同じようにボランティアの現場で活動していらっしゃるんでしょうね。表彰される女性がとても多いことはうれしい、いつも思っています。今、目の前に支援が必要な人がいた時に、親身になって突き進んでいくのはやっぱり女性なのかなという感じはしますよね。



吉永：確かに。すごく辛い思いしている人や厳しい状況を自分のこととして捉え、何とかしようという思いをパワーに変えて突進していくエネルギーは女性の方がすさまじいかも。

安倍：そうですね。感覚的に寄り添えるという感じでしょうかね。男性の場合は、物事を進めるにあたって理論や理屈が先に来るような印象は多少ありますよね。まず NGO、NPO としての形を整えなくてはとか、組織として必要な役職は何かとかが先に来ってしまう気がするんですけど、女性の場合は、今必要なことをとりあえずやってみようみたいなところがあります。男性から見ると無謀に見えてしまうのかもしれないですけど、それが私は女性の、ある意味強みなのかな、と思っています。

吉永：確かに男の人はしっかり考えてから走り、女性はとにかく走り出しながら考えるという傾向があるのかもしれませんが。継続性と即応力、どちらも大事だからこそ、両方がともに存在するのがやはり望ましい形なんじゃないかな。

安倍：そう思いますね。NPO の中には活動の途中で金銭面で苦しくなってしまうところも多いと思うのですが、継続を考えると、組織としてきちんと回していける基盤も必要なのかなと思います。やっぱり両輪でうまく回っていくというのが、一番パワーが発揮できて、長く続く活動になるのではないのでしょうか。

—印象に残る受賞者の活動—

吉永：今までたくさんの活動に接してこられて、受賞者の中で印象に残っている活動というのがありますか。

安倍：それぞれがすべて素晴らしい活動で感銘を受けています。そうですね、海外だと、カンボジアの子どもたちのために自分の人生をかけて頑張っている「アナコットカンボジア」の田中千草さんかな。

それと、日本の塗装業の方たちのボランティアの集まり「塗魂ペインターズ」です。リトアニアに主人と一緒にいった時に、杉原千畝記念館の壁を塗ったのが、塗魂ペインターズでした。公共の施設や、大事な建物なのにボロボロになっているようなところをきれいに塗り直す活動をしていて、たまたま海外では杉原千畝記念館だった。きれいに生まれ変わった記念館を主人と訪問し、これは日本人の方たちに塗っていただいたんですって喜んでもらった時は、皆さんのおかげで日本が評価されていて本当にうれしかったですね。

国内では広島「食べて語ろう会」の中本忠子さん。家庭環境に恵まれない子どもや少年院を出て居場所のない青少年に食事と語らいの場を提供して、非行や再非行の防止のために87歳になる今でも頑張っていられる。ご飯を誰かに作ってあげることは誰でもできることかもしれないけれど、それを長い期間、毎日続けるということはやっ

ぱり誰にでもできることではない。自分の人生がすべてそこにあるという凄さを感じて、圧倒されましたね。ばっちゃんと呼ばれて親しまれている中本さんのような活動、新しくはないかもしれないけれど、私は好きです。

吉永：食べること、誰かと話すことって、生きていく基本ですよね。そこを支えるとなると休んでいられないから、確かにとても地力のいる活動なんだと思います。ところで、最近若い人たちが国内外で社会貢献の活動を展開しているケースが増えてきているように感じるのですが、いかがですか。

安倍：「今どきの若い者は」と、どの時代でも言われてきていますが、表彰された「NPO 法人アクセプト・インターナショナル」の永井陽右さんは大変インパクトがありました。学生時代にソマリアの学生と一緒に前身である「日本ソマリア青年機構」を設立し、テロと紛争の解決という大きな目標を掲げて、テロリストの予備軍やソマリアギャングの更生と社会復帰のために活動しているんです。テロと紛争に真正面から向き合っ、政府や国連とも協力しながら、紛争地の真っ只中で活躍している日本の若い人がいるんですね。このように若い人たちでも本当に頑張っているんなことをやっている人たちがたくさんいるのは心強いですね。根付き始めている若い人たちの社会貢献活動を、これからも積極的に表彰していきたいと思っています。

吉永：若い人は、新しいツールや発想でダイナミックな活動をしますね。社会問題をビジネスで解決しようとするソーシャルビジネスなども展開して、若い人ゆえの強さやユニークさやスマートさがあるように感じます。世代間でうまく交流できて、お互いの経験や新しい可能性などが共有し合えて、補強し合いながら、お互いパワーアップできるといいですね。表彰式典で一堂に会した皆さんが名刺交換などをして、つながりが生まれているようにも感じますが、そのための交流の仕組みはあるのでしょうか。

安倍：現時点では、ほとんどありませんね。そのような意味では、今後、財団がハブ（中核）的な役割を担っていければいいな、と思っています。コロナ禍の今、実際に人が集まるのは難しい状況ですが、オンライン上でも何かできればいい。いろいろな経験や知恵がつながることで、何倍もの力が生まれたり、壁を乗り越えられたりすることもありますから。

—現在の問題に即した財団の在り方とは—

吉永：今、コロナ禍という言葉がありましたが、日本では阪神淡路大震災や東日本大震災のように、大規模な自然災害によって大変つらい状況が生じた時、たくさんの人たちが自分



の力を社会に役立てようという機運が生まれ、社会貢献活動の足腰を鍛えてきたように思います。財団 50 周年の節目の年に新型コロナウイルスという想像もしなかった事態に直面し、NPO やボランティアの人たちにとっても、これまでに経験しなかった試練に見舞われているように思います。

安倍：大変な状況になっていると思います。先日お会いした、海外で社会貢献活動をなさっている方は日本に帰国したら、現地に戻れなくなってしまった。現地での活動が以前のように回っているのか分からない状況です。一方、この状況の中で、温かい心をもって新しく支援の輪に加わる人たちも増えてくるのではないかと期待もあるんです。そういう意味で、さらに人々が助け合える良い世の中になればという希望は持っています。

吉永：そう望みたいですね。ただひとつ心配なのは、コロナのいやらしさは、ともに生きるためにはお互いに隔たるしかない。人との密を避けなくてはいけないということで、特に社会貢献の活動は人との距離がどうしても密接になる面があります。どうやってこれから展開していったらいいのかなど、課題も増えてきたところがありますよね。支援を必要とする状況は一気に拡大しているのに、社会的にも財政的にも人材的にも、ここ 1、2 年がかなりきつくなるのではないかと心配しています。行き詰まったり、壁にぶつかったりする組織が多くなるという心配もあるんですが、会長としてはどのようにお考えですか。

安倍：コロナで大変な状況に陥っている人は急増しています。感染なさって大変な方もいらっしゃるし、医療従事者も大変です。これだけ経済が逼迫してくると、収入がなくなって非常に苦しい思いをしている方々もたくさんいらっしゃいます。気持ちの面でも、ひとり暮らしのご老人などは、とても孤独感を味わっていらっしゃると思うんですね。しかし、いつまでもこの状況が続くとは思いません。少し落ち着いてきた時には、少人



数からでも、対面での活動は少しずつ再開していただきたいと思います。とても手間がかかって大変かもしれませんが、そこはきめ細やかにやっていただくしかないな、と思います。

また、企業の中には業績の良いところがあると聞きました。コロナ禍で接待がなくなったり、オンライン会議によって出張がなくなったりして経費が削減されたことも理由だそうです。さらに富裕層とっていいのか、ある程度金銭的に余裕があって、これまで海外旅行に毎年行っていましたが、いつも素敵なレストランで食事していました、という方々が、コロナ禍でそのようなところでお金を使えなくなって、代わりに宝飾品を買われているという話も聞きました。そのような企業や富裕層に対して、もっと心を豊かにするために、社会のために、お金を使っていただけませんか、という提案ができればいいと思います。

吉永：もっと広く社会に訴えていくということは、さきほど財団が日本の社会貢献活動のハブ的な役割を果たせたらとおっしゃっていたことのひとつにもつながりますね。

安倍：今、若い人たちは物を所有するのではなく、シェアするのが当たり前になっています。足りなければ、お互いに融通し合う、分け合うことが、これからもっと普通になってくるような気がします。

— 50周年を契機にした今後の取り組み —

吉永：さっきのソマリア支援をしている若者のお話もそうでしたけど、今までの活動とは全く違う視点で、全く違う展開で、新しいモデル的な活動が、これを機に若い人たちの中か

ら生まれてくるかもしれませんね。50周年のこの節目のところで、日本にも世界にもコロナや温暖化などものすごく大きな地殻変動的なものが起きていて、その影響がいろいろな形で社会貢献の在り方に押し寄せてくるような気がします。

安倍：そうですね。社会貢献とは一体何か。そういう根源的なことをもう一回考え直す良い機会かもしれないですね。

吉永：確かにそうですね。その大変な時に会長をされて、財団が今後、力を入れていきたいことは何でしょうか？

安倍：ひとつは、50年間せっかく多くの分野でたくさんの方々の活動を表彰しているのだから、個々が点として活動している状態から、もっと広くつなげていくために、ネットワーク化をしていきたいという思いを強く持っています。同じ志を持って、さまざまな形で多方面の社会貢献をしている人同士が関わり合うことによって、また違うアイデアが生まれたり、お互いを補い合ったりできるのではないかと思います。

吉永：ネットワーク化というのは、どのようなイメージですか。

安倍：例えば、活動を続けるのにとても困難な状況に陥って、同じ活動をしている団体にアドバイスをもらいたいという時や、あるいはまったく違う活動をしている団体から壁を突破できる知恵があるかどうか尋ねたいという時に、検索すればさまざまな活動をしている団体や個人がすぐに分かってアクセスできるような仕組みづくりですね。それぞれが持っている力や経験があるわけで、お互いが助け合える仕組みが存在することで、目の

前の壁を乗り越えて活動が継続できる場合もあるのではないかと思いますよね。

吉永：まさにコロナ禍でいろいろな要因で活動が行き詰ってしまっている団体もあると思うので、財団が横につながるための情報を提供できるとしたら、とても助かりますね。さまざまな色合いの糸が縦横に結び合えることが一番力強い社会貢献活動の土壌になる。その土壌づくりということですね。

安倍：もうひとつは、社会貢献をしたいという思いがあって、でもまだなかなかその機会がつかめなくて、一歩前に進めていないという人がけっこういるのではないのでしょうか。今、たくさんの方が社会貢献したいと考えているのではないかと思います。社会貢献のすそ野を広げるという意味で、こんな活動をしている人たちがいますという広報に力を入れたいと考えているんです。ソマリアで活動している永井さんの活動の映像を見て、たくさんの方が「世界でこんな活躍している若者がいるんですね」って驚かれたり、感銘を受けたりしてくださっていたので、活動内容を映像を使って広報する方法は大きなインパクトがあるのではないのでしょうか。

吉永：そうですね。やっぱり知るということが大事ですよね。確かに活字よりも映像の方が有効かもしれませんね。活動している方々の姿に触れることで、参加してみようと一歩前に踏み出せるかも。表彰式典でいつも思うのですが、皆さん、とても生き生きと魅力的な表情をなさっていますものね。

安倍：ですから、表彰された方々のことをたくさんの人に知ってもらいたいです。こんなに立派な大人たちがいっぱいいるんだって、特に子どもたちに教えてあげたいんです。テレビとかで暗いニュースばかり見ていると、子どもたちも日本の将来に対して不安になったり、暗い思いを持ってしまったりするかもしれないんですけど、こんなに立派な大人がたくさんいるんだということが分かれば、じゃあ僕たちも私たちも何か世の中のためにしてみようかなという思いを持つのではないのでしょうか。映像での記録があれば、学校で子どもたちに見てもらえることができます。実現したらうれしいですね。

吉永：それはとてもいいアイデアですね。今、学校でボランティア教育をやっていると思うのですが、何か単位のためや内申書のために形だけのボランティアの経験をしているという面もあるようです。義務的に現場を経験させる前に、社会貢献表彰の受賞者がどんな活動をして、それによって多くの人たちが支えられているという事実をしっかり知ってもらうことで、他者を思いやるやさしさやボランティアの心が育つかもかもしれません。特に今の子どもたちは、人と関わることを厄介なことだと避けてしまう傾向があるといわれていますよね。そういう子どもたちに、他者と関わることは世界を広げることで、自分たちができることや自分の力を社会に役立てることは大事なことで素敵なことなん



だよ、というメッセージになるかもしれませんね。

安倍：学校側も何かボランティア教育の教材を探していると思うんですよね。そういう中で、パッケージを作ってさしあげると、先生も助かるのではないのでしょうか。忙しい先生方にさらなる負担をおかけすることなく、教材として使っていただくということが可能なら、まず1校でも2校でもトライしていただければと思います。

そういえば、最近、企業を早期退職した人たちが作った会社の中に、それぞれが個人事業主のような参加の仕方で、割と自由な組織がありました。働き方も変わってきていて、彼らは社会貢献への意識がとても高いんです。広報宣伝のノウハウを持っている人もいますので、そういう集団とコラボすることで、クオリティの高い映像が提供できます。そうすれば、子どもたちや社会貢献に関心を持っている人たちに訴えかける力のある素材が作れます。

社会貢献への思いを後押ししたり、それらを形にできる道を財団が提案する、あるいはマッチングしていくということも模索したいです。

吉永：それぞれの思いや、それぞれが持つスキルや知恵や人材をマッチングしていくことを担うステーションの役割が果たせたら、社会貢献の土壌をより豊かに広げるお手伝いができますね。

安倍：その結果、新しい社会貢献の形というのも、次世代の子どもたちの中から生まれてくるかもしれないですね。

吉永：今日は、これからの財団が何を目指していくのか、安倍会長の思いをたくさんうかがえました。ありがとうございました。

50周年記念表彰 受賞者紹介



認定 NPO 法人 ロシナンテス理事長
川原尚行

【活動概要】

在スーダン日本国大使館医務官として現地に家族とともに赴任。内戦のため日本からの支援が欧米諸国と同様に停止している中、多くの人たちが病に苦しむ状況を目の当たりにし、2005年外務省を辞職。家族とともに帰国。故郷北九州の方々、高校の仲間、同窓の医師らの支援を受けスーダンで医療活動を始め現在に至る。医療支援の他、井戸採掘や給水所の建設・住民への衛生教育などの水事業、学校建設などの教育事業を行ってきた。支援の輪が広がり法人を設立して15周年を迎える。東日本大震災の復興支援を宮城県名取市、岩沼市、亶理町で5年間行った。2019年からザンビアへの医療支援を開始。新型コロナウイルス感染症対策（マスク、衛生用品の配布、手洗い励行などの啓発活動）を現地のスタッフとともにやり、2021年には、スーダンでため池周辺の環境対策（可能な限り飲用できる水にする）と学校建設をザンビアでは母子保健（マザーシェルター 建設、エコの導入、ヘルスポランティア育成）を行なっている。

URL : <https://www.rocinantes.org/>



北コルドファンにて、子どもたちと





アナコット カンボジア代表
田中千草

【活動概要】

カンボジア国内で一番のマンモス公立小学校、ワット・ポー小学校で教師として赴任し、校長の顧問という立場で教員の意識改革を行い、その質の高さから評判を呼び同校はカンボジアいちのマンモス校となった。音楽の授業（情操教育）が行なわれていなかったカンボジアで、独自で音楽教科書、カリキュラムを作り、教えている。音楽隊が結成され、来賓訪問の際は演奏することもある。また、極度の貧困など家庭に事情のある7歳から16歳までの男女6人を引き取り、生活を共にしている。学校から報酬は受け取っていないため、帰国した際の講演料や預金などで子どもたちとの生活を賄っている。

URL : <http://anacott.web.fc2.com/>



田中さんファミリー
里子たちと



日本から贈られた
ピアノの練習



先生方もピアノ練習



家庭訪問での子どもたち



認定 NPO 法人 女性と子ども支援センター
ウィメンズネット・こうべ代表理事
正井禮子

【活動概要】

「女性や子どもがのびやかで安心して自分らしく生きられる社会をめざして」
1992年団体設立。1995年の震災を契機にDV被害女性と子どもの支援を神戸市で行っている。2004年に開設されたシェルターは、公的機関の保護を受けられなかった女性や子どもの最後の砦となっており、これまでに371組(子ども420人)を保護してきた。電話相談から面接を経て、福祉事務所や弁護士、警察等への付き添い、シェルターへの緊急一時保護、その後の生活再建まで長い支援を行っている。新たな地域での孤立を防ぐための居場所—WACCAを運営し女性や母子の相談や仲間づくり、学習支援等を行い年間延べ約4,000人が利用。コロナ禍で増えたDV相談、その後の家さがしの他、困窮度の高まったシングルマザーのための生活相談や食糧支援も行っている。対等な関係を築くためのデートDV防止授業を中・高・大学生に実施、これまでに約24万人が受講している。

URL : <https://wn-kobe.or.jp/>



安倍会長がWACCAに来られたときの写真



居場所としての機能



ひょうごボランティア・スクエア元
気アップアワード2002 グランプリ
受賞



中高生へのデートDV防止授業2008年～2021年。
25万人に実施



シングルマザーと子どものためのクリスマス



シングルマザー
カフェを開催時の
写真



森口エミリオ秀幸

【活動概要】

南米ブラジルで言葉の壁から病院に通うことができない日系移住者を巡回診療で支え続ける、日系人の医師。祖父が（故・細江静男氏）が1930年代に始め、その後、父（森口幸雄氏 95歳）が引き継ぎ、2007年からは3代目として活動の中核を担っている。毎年約3,000km以上の距離を移動しながら約1ヶ月かけて日系移住者を訪ね、無償で診療を行っている。診療のメインは日系I世として暮らす60～80代の人たち。長年、山奥の日系入植地で過してきたためポルトガル語が話せず、一般の病院での診療が受けられない状況にある人々。運用資金の多くを自己負担でまかなう厳しい状況が続くが、活動は現地の日系移住者の人々の命綱となっている。



パーティー



キャラバンのバスの前で
スタッフと



移動中の車内



診療風景



スタッフとのミーティング



特定非営利活動法人 BOND プロジェクト代表 橋ジュン

【活動概要】

30年近く前から、終電が終わっても新宿や渋谷の街に留まっている少女たちを見て「なぜここにいるのか」気になり、声をかけ、彼女たちの思いに耳を傾けてきた。話を聴くうちに、少女たちは家にも学校にも居場所が無く、トラブルに巻き込まれていても信頼できる相談相手もいないことがわかる。それを記事にして世の中に発信していたが、目の前にいる少女たちに自分たちが出来ることは何かと2009年にBONDプロジェクトを始めた。渋谷を中心とした街頭パトロールやアンケートを実施し、必要によってはシェルターで一時保護する。少女たちの「声」を伝えるフリーマガジン VOICES を発行し、メールや電話で相談を受ける。そして弁護士や行政機関、医療機関などの専門家へ繋ぐ。活動の中心はSNSを使用した相談になりつつあり、LINE相談を週5回行っている。いずれの活動でも本人に直接会って「大丈夫。一緒にどうするか考えよう」が活動の基本。これまでに3,000人以上の少女たちの相談にのってきた。

URL : <https://bondproject.jp/>

路上で話を聞く橋氏



スタッフミーティング



BONDプロジェクト活動を支えるスタッフ



町中で聴きとり

表彰選考委員 プロフィール

選考委員長

内館 牧子

脚本家 東北大学相撲部総監督

東京都教育委員会 教育委員ほか

脚本：「ひらり」「てやんでえッ!」「私の青空」「毛利元就」「エイジハラスメント」「小さな神たちの祭り」ほか多数

著書：「終わった人」「今度生まれたら」ほか多数



吉永 みち子

ノンフィクション作家

公益財団法人民間放送教育協会会長

「ワイド!スクランブル」コメンテーター

著書：「気がつけば騎手の女房」「性同一性障害」「26の生きざま」「老いの世も目線を変えれば面白い」「試練は女のダイヤモンド」ほか多数



大武 健一郎

元国税庁長官

認定 NPO 法人ベトナム簿記普及推進協議会名誉会長 人事院公務員研修所客員教授

著書：「税財政の本道一国のかたちをみすえて」「平和のプロ日本は戦争のプロベトナムに学べ」ほか多数

久米 信行

iU 情報経営イノベーション専門職大学教授

著書：「メール道」「ブログ道」(NTT 出版)「NPO のための IT 活動講座 効果が上がる情報発信術」「すぐやる人だけがチャンスを手に入れる」ほか多数



小川 記代子

産経新聞 大阪本社

編集局編集長



選考委員*座談会

社会貢献者表彰 50周年にあたり、選考いただいている5人の選考委員にお集まりいただき、座談会を開催しました。

これまでの選考に関わってこられたの感想や、印象に残っておられる受賞者の方や活動からうかがいます

大武：私が一番印象に残ったのは、カンボジアのシムリアップで命がけで子供たちを救っている「アナコットカンボジア」の田中千草さん（平成25年度受賞）。自分の人生を投げ打って取り組む姿は、唯々（ただただ）尊敬します。ただ自分の命をどんどん削っているイメージがあって非常に心配です。私もベトナム、カンボジア、あるいはミャンマーで社会貢献的な活動していて気づいたのは、そういう大変な活動を平気でやっている日本人がいかに多いかということ。少なくとも、宗教的な使命感ではなく、自分の善意だけで、命をかけて無償でボランティアをしている。日本の人たちは自分の人生をかけてやっている方が多いということに一番感激しました。

また、ミャンマーで活動されていると思いますが、ジャパンハートの吉岡秀人さん（第48回受賞）も「医師とは人の命を救う仕事」という信念のもと、ミャンマーで命懸けの活動をな



さっていて、現地の方々からの高い評価も得ておられます。

昨年受賞された、カンボジアで黒胡椒を作っている倉田浩伸さん（第55回受賞）は、基本的に森林を開発してそこで現地の人に植林作業を依頼して、黒胡椒を産業として再浮揚させています。ボランティアではなく株式会社として、農業の再生、地方の再興に寄与しているのは素晴らしい活動だと思います。

海外などにおける活動を見ていると、日本人ってまだまだ捨てたものじゃない。社会貢献支援財団の選考委員をやらせていただいて、上から目線の援助ではなく、彼らの地べたを這いつくばるようなボランティア活動が、いかにこれからの社会で重要かということを感じるとともに、いい勉強をさせていただいております。

吉永：国の内外を問わず、ありとあらゆる分野で、たくさんの団体や個人が日本を支えていると同時に、外国の人への支援は日本の評価にも多大な貢献をしています。大きな団体が大きな支援を安定的に展開している大きな組織もありますし、1人でコツコツと子供の通学路の安全を守っているケースや、刑務所での散髪を長期間続けている人など、目立たないところで地道に人知れず活動が続いている方もたくさんいらっしゃる。人との関係が希薄になったといわれますが、毎年の選考で人の温かさに触れることができたのは貴重な体験でした。

印象に残るといえば、アナコットカンボジアの田中さんの文字通り命がけでカンボジアの子供に尽くす姿には本当に頭が下がります。ただ、命がけということには、日本の抱えているボランティアの大きな問題が内包されているような気もしています。

命がけでやらない人は何かいい加減だと思われてしまう。そんな流れも若干、日本の社会の中には残っている。ボランティアという言葉の歴史も浅く、外国では余力のある人が余力を社会のために使う奉仕だけど、日本人はなぜか減私になってしまいがちという指摘も耳にすることがあります。

ただ、年月を経て日本のボランティア活動も随分変わったと思います。阪神淡路大震災、東日本大震災という大きな災害に見舞われ、日本中から自分にできることを行動に起こさなけれ



ばと、今までボランティアに無縁な人たちが立ち上がった。これが日本の土壌を変えるきっかけになったのではないかと思います。

内館：お二人の話を聞いていて、全く同感です。私は「敷島の大和心の雄々しきことあるときぞあらわれにける」という明治天皇の御製の歌を、大震災の時も今回のコロナの時もいろいろなボランティア活動に接する時にも思い出すんですね、

やっぱり日本人はいざとなったら、自分が立ち上がってみんなで助け合う。今年の豪雪に何千台もの車が閉じ込められた時にも、みんなで持っている食べ物を分けたり、近くの家が暖を提供したり、そういうことができる国民なんだなということを感じましたね。

私はルーツが東北で、国の復興構想会議のメンバーでもありましたから、東日本大震災後すぐに東北に行ったんです。被災地の皆さんもボランティアの皆さんも、身を粉にして一生懸命でした。私は日本人に備わった格を見たと思いました。

私は選考委員を16年間やらせていただいております、印象的な受賞者はたくさんおられます。その活動を見ていて、今もまだ続いているのかな、これは大変だろうな、と思うものも結構ありました。でも、細々とでも続けていけば、またそれが大きくなるという可能性もあるわけです。

曾野綾子さんが選考委員長だった時に、「皆様に差し上げる賞金は、ご自分のためにお使いください。副賞の賞金をまた善意で他人のために使うなんてことをしないで」と表彰式典でおっしゃったのを聞いて感動しました。とにかく、滅私になりがちなか、この言葉こそ救いになります。ですから私もその言葉を引き継いで言わせていただいております。

小川：この中で一番最近、参加させていただきました。私は新聞社の人間なので、やっぱりどうしてもこれは取材をして記事になるのかなとか、見出しが立つかなという観点で見えてしまうところがあります。この選考会を通して、取材しないだろうと思うようなことに、こんなにドラ



マがあるんだということを知りました。大変良い機会になったと思います。また新聞社というのは、どちらかと言うと、悪いことの方を報じることが多いものでして、良いことに接することができて心が浄化されるというか、良いことのニュース価値をひしひしと感じました。

印象に残ったというと、まだ少ない選考の中では、人を救おうと、服のままとっさに海に飛び込んだフェリー会社の女性社員の方です。助けられた方は自殺の志願者だったから助けてくれなくてよかったのに、と言った。それに対し、救助した女性が、事情は知らないけど私は助けたんだから生きなきゃダメ、と叱った。すごい女性だ、と思いました。

選考して思うのは、社会問題でも人命救助でも、何かの事態に直面した時に、その人の本当の姿が出るということですね。海外で厳しい現実遭遇して支援活動に乗り出す方がいらっしゃる。そのまま日本に帰国して別の人生を送ってもいいのに、何かしなくてはと思われ。そこに滅私がある場合、それがいいのかという問題もありますが、選考をしていて覚悟が突きつけられている気がします。

そういう意味では、表彰式典で拝見する皆さんは、覚悟を決めて活動に取り組んでいらっしゃるからか、堂々としていて、いい顔をなさっているのが印象的です。

久米：私は3つの点で、いつも迷いながら選考しています。

まず1点めは、応募者が私よりも立派に見えること。自分ごときが選考委員をやる資格があるのだろうかいつも思ってしまいます。私は郷里の墨田区を中心にいくつかの公益法人の役員を拝命しておりますが、現場でそれこそ命を投げ打ってやっている人に比べると、あまりにも自分が小さく感じられてしまうのです。

2点めは、社会貢献のカテゴリーが多岐にわたること。例えば、人命救助をした人、発展途上国で医療活動をしている人、刑務所出所者の就業支援をしている人を比べて評価するのは困難なのです。

3点めは、長年地道に続けてきたベテランと、新しい活動を始めた若い人が混在しているこ



と。草の根で黙々と人知れず続けてきた年長者が多い一方で、若い人はIT活用で上手にPRし、活動のパートナーも見つけて可能性を広げています。弱い人を助けてあげたい気持ちも、逆に若い人を応援したい気持ちもあるので、どちらを表彰するのかいつも迷ってしまいます。

印象に残っている受賞者はたくさんいらっしゃいますが、あえて挙げるとすると、大武さんとカンボジアに行って活動を拝見した田中千草さん（平成25年度受賞）、カンボジアの人の伝統的な織物を復活させた故・森本喜久男さん（平成22年度受賞）、カンボジアで地雷除去とその後の町興しをしている高山良二さん（平成23年度受賞）。昨年受賞した早稲田大学に在学中から国連が引き上げたソマリアに行って、ギャングと接しながら活動している「NPO法人 Accept International」の永井陽右さん（第55回受賞）が思い浮かびます。

今後、私が選考委員として貢献できるとしたら、地道にアナログでやっている活動家の方をインターネット広報で支え、クラウドファンディングなどでお金を集めたり、若い後継者が見つかるような仕組みを作ったりしていくことではないかと思っています。

当財団の表彰事業は、個人や組織的な活動、地域に特化したものから全国的、あるいは国際的と大変幅が広いのが特徴ですが、表彰事業の意義を含め、今後の進め方などについてうかがいます

大武：菅義偉首相が、目指す社会像として「自助、共助、公助」とおっしゃいました。これは米沢藩主・上杉鷹山の言葉なんですね。天明の大飢饉の時に、米沢藩では1人も餓死者を出さなかった。大変な財政難と飢饉が続いている中で、10人組とかチームを作り、お互い助け合うという互助の精神で乗り切った。これが今日、我々が言う共助に当たるわけです。一方で、全員の家にお米を配った。これが扶助、今で言う公助だと思います。戦後日本は自助と公助しなくなり、互助という部分がなくなっている。

今、私たちはコロナや天災などに直面し、我々が表彰してきたようなこの互助の活動こそが



本当にこれからの社会で求められることではないかと思います。次の時代の日本では、本当に困った人たちを自分の周りで助ける、ということが現実になっていくのではないのでしょうか。互助の部分アピールできる表彰形態にしてほしいです。

内館：私が携わった16年間の受賞者を思い起こしますと、どんなジャンルであれ、弱者に寄り添う、弱者に手を貸すという人たちなんですね。たとえば、身体に障害を持っている人たちへ、老人や性的虐待を受けている人たちへ、母子家庭、外国人など、社会的弱者等々の人たちへというようにです。16年前から、ずっとその傾向があるわけです。ということは、この部分が従来から、最も互助が足りていなかったということですよ。それが明確になってきた。自分にも何らかの互助ができるのではないかと思っている人は多いはず。この賞はすでにそれを実践されている方々です。ですからもっとこの賞を世に知らしめたいと、いつも思っています。雑誌や週刊誌に書いたりもしているのですが、まだ知らない人が結構多いですね。それに、誰かが見ていて表彰してくれたということはすごく励みになりますから。

吉永：今後のことで一つ考えるのは、人命救助への微妙な評価の変化。目の前の命の危機に対してとっさに身体が動くというのは、やはり人間の持つ善の資質なのだと思います。そういう意味では社会貢献と根は同じで、それが余計なお世話だという流れが生まれると、表彰も難しくなるのではないかと懸念しています。「それでも助けようとした」という行為はやはり胸を打ちます。

それと今回のコロナ禍。これは被災地がある天災とは違う。被災の地域や人々への支援と違い、世界中がすべて被災者という状況で、社会のあらゆる部分、社会貢献の活動にも来年、再来年と甚大な影響が出てくるものと思っています。

人と関わりを深く持たなければできない活動がとて難しくなっている上に、経済の逼迫で寄付などの活動資金もボランティアなどの人手も集まらない。今後、コロナで経済的格差が絶



望的に広がる心配もあり、社会貢献の活動が命綱になる状況も増えるかと思います。親の失業や子供の飢餓、虐待など、かつてない厳しい社会状況の中、切羽詰まった社会貢献活動をどうやって支えていけるのかというのが、大きなテーマになってくるような気がします。

大武：家族が壊れ出しているんですね、これはもう明確にそうだと思います。東京都新宿区の保護司をやっている方々からいろいろと話をうかがっているんですけども、本当にひどいです。家にいるしかない状況で継父から性的虐待をされて家から逃げ出した子が渋谷や新宿にはいっぱいいるそうです。しかしそれは氷山の一角だと思います。

家族関係が完全に壊れ出して、助け出さなくてはならない子供たちが増えている。本気でそれを救う組織を作ることを応援しなくてはいけないのかもしれない。

一方で一人親の家族もものすごく増えている。そして一人親で子供を育てているのは大体が女性の方なんです。非常に苦勞している人が、さらにこのコロナ禍で雇用が切られている。確かに今までとはちょっと違う形の活動をしなければならない。命をかける方ではなく、命を救う方が必要になってきている。

吉永：もともと社会の歪みが顕著になっている時にコロナが追い打ちをかけている状況なので、これまでにない窮状がいろいろ生まれそうです。実際、NPOの人たちも自分の生活も厳しくなっている中で社会貢献活動を維持していくことになる。一番必要とされる時に必要な活動ができなくなる危機に直面したNPOなどのための駆け込み寺的な相談窓口や、他の組織との連携や知恵の共有などで乗り切るためにコーディネートするステーションがさらに必要になっていくのではないかと考えています。

久米：加藤哲夫さんという、せんだい・みやぎNPOセンターを作った先人がいらっしゃいま



す。この方は、自ら仙台中のNPOを訪ね歩いて電話帳を作るところからNPOの中間支援組織を作り上げたのです。もし社会貢献支援財団で、インターネットで受賞者を紹介するマッチングサービスを作れたら、受賞者同士や、活動を応援したい企業や個人にもすごく役立つと思うのです。

私の地元墨田区では、NPO同士で助け合う試みとして、子供を地域で見守る施設を運営する団体と、子供にいい音楽を聴かせようと草の根の活動をしている新日本フィルハーモニー交響楽団が協働することで、親子で生演奏を聴くイベントが実現しました。お互い持っている機能や会員を組み合わせると、掛け算以上のことができるということの事例ですが、こうしたコラボレーションが社会貢献者の間で次々に起これば良いと考えます。

大武：今、海外の活動は本当に難しい。現地に行けない、あるいは行ったら行ったきりになる。国内も悲惨で、今まで表彰した人たちも、これまでのように子供たちを預かれないでしょうし、子ども食堂なども開催できないんですね。

いずれにしてもこれからコロナの中であって、国内での表彰者をどうやって復活させてあげられるかという活動をテーマとすることもできるような気がしますね。

内館：電話帳の話が出ましたが、「自分はこんなことができます」というような登録システムを作れないものではないのでしょうか。と言うのは、東日本大震災の時に、被災地から相撲の話をしに来てくれと言われて、お受けしたら老若男女がいっぱい集まってくれた。その時に初めて、私の相撲の知識が役に立つんだ、と思ったんです。

それと同じで絶対役に立たないんじゃないかと思っているような趣味でも知識でもなんでもいいから、できることを登録してオファーしてもらいやり方もあると思います。



久米：コロナ禍でデジタル教育が進んでいますが、社会貢献支援財団が教育支援機関になるということも考えられます。都会の子供たちは昔のような近所付き合いがなく、助け合い社会貢献をする心を育むことが難しいと考えられます。

ですから、社会貢献支援財団で表彰された方々と、その素晴らしい活動を、子供たち、学生たちが取材して、短い動画を創ってもらうのはいかがでしょう。その動画を、学校の教材に使ってもらえば、感動が伝わって共感が生まれ、子供たちに社会貢献の意識が自然に芽生えることでしょうか。また子供たち若者たちが困ったときに、表彰者のネットワークを検索できれば、きっと救いの手を差し伸べてくれる人や団体が見つかるでしょう。そんな互助のきっかけづくりにもなる新しい教科書になるのではないかと思います。

吉永：東日本大震災の時も特別バージョンの表彰をしましたが、今回のコロナ禍でもやはりこの時期に何が一番最重要課題なのかを考慮して、ここ2、3年の世の中の急激な変化に対応する支援を応援する枠組みがあってもいいのかなと感じています。

大武：新しい活動も始まっているはずなんですよ、だからぜひ、今までの子供関連、母親関連を拾って情報収集をしていただいて、こちらからアプローチしてもらえると、新しい活動が見つかる気がします。

最後に受賞者の皆様にメッセージをお願いします

内館：社会貢献支援財団が、とうとう半世紀を迎えました。私は表彰選考委員を16年務めておりますが、財団の「少しでも貢献者の力になりたい」という熱意を感じ続けて参りました。

選考委員になって何より目が覚めたのは、こんなにも身を呈して社会のために、他人のため



に尽くす人々の多さでした。我が身を反省させられ、私も殊勝にも「ご恩返し」を考えるようになりました。これまで生きて来られたのは、社会や人々のおかげだと選考会を通じて強く思わされたのです。

これから財団は地道に、公平に、細やかに、貢献者の小さな支えになりながら、一世紀をめざしてほしいと願っています。

大武：社会貢献支援財団50周年おめでとうございます。財団の選考委員をさせていただき、日本には多くの心優しい素晴らしい方々がおられることを知りました。

受賞されている方々は日本の、そして世界の苦しい立場に置かれている方々を何の下心もなく、優しさから精一杯支えるという活動をされている方々です。

自分もアジア各国を回り、多くの日本人が人知れず心温まる活動をして、多くの方々に感謝されていることを知りました。NPO法人だけでなく、途上国で企業経営している方々にも、利益を上げることより、地域住民の雇用を作り、地域発展に尽くしている方々が多くいることを知りました。マスコミにはあまり取り上げられませんが、素晴らしい方々がおられることを誇りに感じます。

これからも、そのような方々が多く出てこられて、財団が末永く活動を続けていただけることを心より祈念しています。

小川：選考していて、いつも思います。「人っていいな、すごいな」と。このことに改めて気づく機会はなかなかありません。かけがえのない時間です。

人には、いい面もすごい面も抜けている面もあります。素晴らしい活動をなさっている皆さんには、だからこそ隙をつくってほしい。突っ込み、突っ込まれ、風通しよく。それが活動の長続きと社会への浸透につながると思うからです。人の心を前向きにし、支える活動を続ける



皆さんに、心から敬意を表します。

久米：皆さんが生涯をかけて取り組んできた一大事業は、これから多くの若者たちが知るべき生きた教科書です。私は新大学 iU の教員として、起業を目指す若者たちを育成しています。単に ICT・英語・ビジネス知識を学ぶだけでは、真の起業家にはなれません。社会課題を見つけ出す眼、悩める人たちに共感する情、解決まであきらめない志を、皆さんの生き方から学んでほしいのです。ケーススタディやインターンなどでぜひ学生と皆さんの団体とで協働させてください。

吉永：毎年、授賞式でお目にかかる皆さんは、とても表情が柔らかく人としての魅力と引力にあふれていらっしゃると思います。活動を長く続けている過程には、きっと山や谷や崖っぶちで苦悩された時があったはずなのに、それらを乗り越えてきた重みと自信が穏やかな笑顔から確かに伝わってきて毎回圧倒されています。時にはひと休み、時には脇道を回り、時にはメンバーで楽しい時を過ごしなが、活動を自らのエネルギーに循環させていくことが長く続ける秘訣なのかも…。頑張り過ぎずに楽しみを分け合って、明るい継続の達人を目指していただければと願っております。

以上、5人の選考委員の皆さんに選考を振り返り、お話をいただきました



歴代会長一覧

初代
笹川 良一



(昭和 46 年 5 月～平成 7 年 7 月)

二代
堀 武夫



(平成 7 年 9 月～平成 11 年 6 月)

三代
樋口 廣太郎



(平成 11 年 7 月～平成 15 年 6 月)

四代
猪熊 葉子



(平成 15 年 7 月～平成 19 年 6 月)

五代
日下 公人



(平成 19 年 7 月～平成 26 年 6 月)

六代
安倍 昭恵



(平成 26 年 6 月～現在)